

手賀沼における抽水植物の衰退現象～マコモ・ヒメガマ・外来ハスを中心に～

小倉久子¹⁾, 林紀男²⁾, 八鍬雅子¹⁾, 竹内順子¹⁾

1)美しい手賀沼を愛する市民の連合会, 2)千葉県立中央博物館

手賀沼では、干拓事業による浅瀬の消失に伴い 1960 年代から水生植物の衰退が進んだ。沈水植物・浮葉植物は野生絶滅し、抽水植物のヨシ、マコモ、ヒメガマなどが沼岸に水深に応じた帶状群落を形成している。

近年、抽水植物の群落規模の衰退が認められることから、2007 年と 2020 年の植生群落規模を比較検証した。調査は両年とも、現場踏査による目視確認および船上からの山立てによる方法を用いた。調査範囲は、下手賀沼・手賀川を除外した手賀沼堤外地とした。

マコモ群落は、2007 年に我孫子市根戸新田地先、柏市片山新田地先など計約 3ha であった。2020 年にはこれらマコモ群落のほぼ全てが消失し、各地点とも複数株が株立ち残存している状況である。

ヒメガマ群落は、2007 年に我孫子市高野山新田地先、我孫子市五本松地先をはじめ沼内の多くの岸辺においてヨシ帯の沖合側に広く群落展開が認められ、計約 38ha であった。2020 年にはこれらヒメガマ群落の多くが衰退し、マコモ同様に株の残存が目視確認できる状況までに衰退した。

ハス群落は、柏市岩井新田地先に 1947 年に国内外来種ハスが人為移植され、年々群落規模を拡大し、沼岸のヒメガマ・マコモを駆逐しながら 2017 年に群落規模を 23.6ha にまで広げた。しかし、ハス群落は 2020 年には大きく減衰し、沼岸のヨシ群落の隙間に株が複数残るだけに消滅していた。

マコモ、ヒメガマ、ハスの群落消失面積は合計で約 64ha である。これら抽水植物群落の衰退原因は 2020 年末には特定できていない。

※小倉久子・林 紀男・八鍬雅子・竹内順子. 2021. 手賀沼における抽水植物の衰退現象
～マコモ・ヒメガマ・外来ハスを中心に～. 千葉生物誌. 71(2): 98. より引用転載